

基の弥陀身土観

——『大乘法苑義林章』『三身義林』を中心として——

林 香 奈

はじめに

中国法相宗の初祖である基（六三一—六八二）の弥陀仏格判定については、『大乘法苑義林章』（以下『義林章』）や、偽撰説が根強いもののおなじく基撰とされる『阿弥陀経疏』において、通報化を容認する文章が散見されることから、従来、基は浄土經典を解釈する際に通報化の立場を取っているとの見解が多く示されてきた⁽¹⁾。その代表者の一人が望月信亨氏であるが、しかし一方で望月氏は『支那浄土教理史』（二〇五頁）の中で、一転して基は唯報説を取ると解釈している。その理由として、望月氏は『弥勒上生経贊』及び『義林章』『三身義林』の記述を挙げているが、その詳細な内容については触れていない。そこで筆者は、『義林章』『三身義林』をより詳細に検討することにより、基の仏身・仏土論において阿弥陀仏をどのように位置づけていたのか、あらためて考察してみたいと思う。

一、基以前の弥陀身土観

基の仏身・仏土論を見る前に、まず基よりも以前の諸師たちが阿弥陀仏の仏身・仏土をどのように考察していたか確認しておく。

まず聖道諸師の例として、法報応の三身説を提唱した淨影寺慧遠（五三三—五九二）の主張を見てみると、慧遠は『観経疏』の中で「今此所論、是應非真。故彼觀音授記經云、無量壽佛命雖長久亦有終盡。故知是應」（大正三七・一七三下）と述べ、『観経』の阿弥陀仏を応身とした。これは、『観音授記經』に「阿彌陀佛壽命無量百千億劫。當有終極」（大正二二・三七七上）と説かれており、慧遠はこれを踏まえて弥陀応身説を唱えたのである。

しかしすべての仏は三身を備えているとはいえず、浄土經典の阿弥陀仏を低位の仏身とする主張は、凡夫救済を訴える浄土教には受け入れがたいものであった。そのため、道綽（五

六二―四六五）は『安樂集』において「現在彌陀是報佛、極樂

寶莊嚴國是報土」（大正四七・五下）と述べ、善導（六一―一六

八二）も『觀經疏』にて「問曰。彌陀淨國、為當是報、是化

也。答曰。是報非化」（大正三七・二五〇中）として、道綽の

見解を踏襲している。そして、念仏により報土としての西方

淨土に凡夫も往生でき、報身を見ることができるとするので

ある。だがその際、『觀音授記經』に阿彌陀仏の入滅が説か

れていることは大きな問題となった。これに対して、道綽は

「此是報身、示現隱沒相。非滅度也」（大正四七・六上）として、

それは真の入滅ではないと解釈し、善導は「入不入義者唯是

諸佛境界。尚非三乘淺智所闕。豈況小凡輒能知也」（大正三

七・二五〇中）と述べ、仏の入滅を型どおりに受け取することに

疑問を呈している。しかしいずれにせよ、『觀音授記經』の記

述を報身説の積極的根拠としては利用できずにいると言えよ

う。

また、道綽の時代に訳出されていた『鼓音聲經』には、「阿

彌陀佛如來應正遍知、父名月上轉輪聖王、其母名曰殊勝妙顏

（大正二二・三五二中）などと説かれ、阿彌陀仏化身説のもう一

つの根拠となっていた。これに対し、道綽は「阿彌陀佛亦具

三身。極樂出現者、即是報身。今言有父母者、是穢土中示現

化身父母也」（大正四七・六上）として、『鼓音聲經』の阿彌陀

基の彌陀身土觀（林）

している。

二、従来の説における基の仏身・仏土論

以上のような仏身・仏土論の展開を受け、基も『義林章』
卷第七などにおいて仏身・仏土論に言及するのだが、その基
礎となっているのは法相宗の根本聖典たる『成唯識論』、及
び『仏地經論』などの唯識学派の論書である。『成唯識論』
卷第十には、仏身について、

一自性身。謂諸如來眞淨法界。受用變化平等所依。（略）二受用身。

此有二種。一自受用。（略）二他受用。謂諸如來由平等智示現微

妙淨功德身。居純淨土、爲住十地諸菩薩衆、現大神通。轉正法輪、

決衆疑網、令彼受用大乘法樂。合此二種、名受用身。三變化身。

謂諸如來由成事智變現無量隨類化身。居淨穢土、爲未登地諸菩薩

衆、二乘異生、稱彼機宜、現通說法、令各獲得諸利樂事

（大正三一・五七下―五八上）

とあり、自性身・自受用身・他受用身・變化身の四身説が説
かれている。ここでは、初地以上の菩薩は他受用身を見、凡
夫と二乗は變化身を見たとされているので、これにしたがえ
ば阿彌陀仏とその淨土も通報化であると言えるだろう。

『義林章』「仏土章」では、彌陀の身土について第二釈で唯
報説に触れたあと、「二三、西方通於報・化二土」（大正四五・
三七一下）として、通報化による解釈を挙げている。そして、

第一釈の唯報説とどちらを取るかは「二釋任情取捨隨意」（同上）、つまり各自の好みにしたがってよいと述べられている。従来の研究では、この通報化説が法相宗の教義に合致していること、及び基撰とされる『阿弥陀経疏』（大正三七・三二一中）にも通報化の解釈が示されていることから、「仏土章」の第二釈のみが注目されていた。

三、『義林章』『三身義林』に見る阿弥陀仏他受用身説

しかし『義林章』『三身義林』では、基は「阿彌陀佛眼如四大海水。眉間豪相如五須彌山。身高六十萬億那由他恒河沙由旬。應是初地菩薩所見」（大正四五・三六四下）と述べ、『観経』（大正二二・三四三中）に説かれる阿弥陀仏の相を、初地の菩薩が見る他受用身のものであるとした上で、従来化身説の根拠とされてきた『観音授記経』と『鼓音聲経』を、他受用身の証として引用している。すなわち、「鼓音王經説。阿彌陀佛、父名月上、母名殊勝妙顏。（略）無量壽論云。女人、及根缺、二乘種・不生。既是報土無實女人。佛及菩薩化爲母等」（同上）として、『鼓音聲経』に阿弥陀仏の父母などを説くのは菩薩の教化のためであると述べているのである。また、『観音授記経』についても、「観音授記經説。阿彌陀佛壽命無量、百千萬億劫富有終極。滅度之後、觀世音菩薩、明相出時、

於七寶菩提樹下成等正覺、名普光功德山王佛。（略）十地機宜先已淳熟。故化彼類即身成佛。不説先住何處何天後來補處。即以此身就座成佛。是他受用大悲所熏」（同・三六五上）と述べ、阿弥陀仏の入滅が説かれていても、観音菩薩が兜率天などから下ってくる記述がなく、観音菩薩がその浄土でその身のまま成仏している以上はこれを他受用土と見るべきである、と基は主張している。

『観音授記経』に関するこのような解釈の背景には、基が整理した菩薩成仏に関する理論が存在する。基によると、菩薩には三種類ある。『義林章』『三身義林』には、

菩薩種類有三。一一生所繫。如彌勒等。先處人中身名一生所繫。（略）二最後身・三坐道場。此二局在成佛身位。化身既示。一受用身雖不見文、准此應悉。自受用身七地以前名一生繫。八地以後名最後身。更無生故。處蓮花座名坐道場。他受用身如觀音前身、名一生所繫。觀音之身名最後身。處七寶座名坐道場。法身無生便無是義

（大正四五・三六五中）

とあり、第一は八相成道をなす菩薩であり、これは変化身の前身である。続いて、第二は最後身の菩薩、これは自受用及び他受用身の前身となる。第三は成仏直前の坐道場の菩薩であるとする。この中で、観音菩薩については「他受用身は觀音の前身の如きを、一生所繫と名づく。觀音の身は最後身と名づく。七寶座に處せば坐道場と名づく」とあり、『観音授

『記經』とあわせて考えると、この經典の觀音菩薩は降下兜率天に始まる八相成道をしないので、一生所繫ではなく最後身の菩薩であり、成仏すると他受用身となる。よって、觀音菩薩が成仏直前にいた阿弥陀仏の淨土もまた他受用土なのであり、阿弥陀仏は他受用身である、という説が成り立つ。

この三身義林と同様の仏身・仏土論は、望月氏の指摘どおり、基の『弥勒上生經贊』（大正三八・二七四上―下）にも見ることが出来る。「三身義林」において、阿弥陀仏唯報説を主張するために挙げられている經典・論書は『觀經』、『鼓音聲經』、世親の『淨土論』、『觀音授記經』と多岐にわたっており、これは『義林章』「仏土章」において、基が「二云、准攝大乘等、西方乃是他受用土」（同・三七一中）として第一釈に唯報説を挙げ、上記の經論に『攝大乘論』を加えて、唯報説の証としていることに対応する。

四、結論

以上のことから、基は従来阿弥陀仏化身説の根拠とされてきた『觀音授記經』や『鼓音聲經』などに対して、理路整然とした斬新な解釈をほどこし、阿弥陀仏他受用身説について積極的な考察を行っていることが判明した。無論、それは別時意説を前提としての報身説であって、凡夫報土往生を認める淨土教とは一線を画するものである。しかし、道綽や善導

らが解釈に苦しんだ『觀音授記經』などを他受用身説の根拠として用いる基の姿勢は、淨土教とは異なる立場から弥陀報身説を考察しているものとして注目すべきである。

一方、『義林章』第七巻を全体的に眺めてみると、化身としての弥陀への言及はほとんどなされていない。このことは、基が他受用身としての阿弥陀仏について、強い関心を持っていたことをうかがわせるものであり、『義林章』「三身義林」と『弥勒上生經贊』の内容が重複していることから、その背景として基の弥勒信仰が関係しているように思われる。それについては、また稿を改めて論じたい。

1 基の仏身・仏土論に関する主な先行研究としては、大南龍昇「慈恩大師の淨土觀」、『仏教論叢』一五、一九七一年、齋藤舜健「伝慈恩大師撰『阿弥陀經疏』の仏身・仏土論」、『印度学仏教学研究』八六（四三―二）、一九九四年、中川善教「慈恩大師淨土録」、『性相・法隆寺学研究』一九九四年、神子土恵龍「弥陀身土思想の展開」（一九五〇年）、望月信亨『淨土教の研究』（一九三〇年）などがある。

（キーワード） 仏身・仏土論、基、法相宗、『大乘法苑義林章』、淨土教

（東洋大学大学院）

the Buddha in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 and the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa juan 29*, because there are issues on interpretation of (1) the treatise on two bodies of the Buddha and of (2) the *Mahāprajñāpāramitopadeśa*. After due consideration of these two issues, I believe that the concept of the treatise on the body of the Buddha in the *Mahāprajñāpāramitopadeśa 29* is closest to the treatise on two bodies of the Buddha in the *Wangsheng lunzhu*.

10. Jizang's Theory of Rebirth in Sukhāvātī: Wuliangshou visualization and the repentance of one beyond acquisition

Masahiko Itō

This study tries to clarify the Sanlun (三論) scholar Jizang's thought regarding Pure Land ideas. In particular it considers the Wuliangshou visualization (無量壽觀), and clarifies its relation to the repentance of the individual beyond the idea of acquisition (無所得人懺悔).

11. The Judgment of the Buddha-kāya of Amitābha in the Chapter on the Three Buddha Bodies in the *Dacheng fayuan yilin zhang*

Kana HAYASHI

We find in the chapter of Buddha's land (Fotu zhang 仏土章) in Ji's 基 *Dacheng fayuan yilin zhang* 『大乘法苑義林章』 his discussion of the body and land of the Buddha Amitābha. Here it is stated that Amitābha's pure land combines the saṃbhoga-kāya and nirmāṇa-kāya lands. However, in the chapter on buddha-kāya, Sanshen yilin 三身義林 in the same work, there is a description which emphasizes that Amitābha is saṃbhoga-kāya, this opinion being justified by many scriptural citations. Especially Ji's interpretations of the *Guyinsheng jing* 『鼓音聲經』 and the *Guanyin shouji jing* 『觀音授記經』 are unique and original. Ji did not accept the theory of Pure Land Buddhism (Jingtujiao 淨土教) that ordinary people (*fanfu* 凡夫) would be able to be born in a saṃbhoga-kāya's land only by invocation of Amitābha. But I

wish to point out in this paper that he was very interested in the fact that Amitābha is a saṃbhoga-kāya.

12. An Analysis of the Theory of *nianfo* in the *Lianzong Baojian*

Xin ZHANG

The *Lianzong Baojian* (T47, No.1973; 10 fascicles) by Youtan Pudu (1199–1277) is one of the most important works on Pure-land Buddhism in the Yuan dynasty (1206–1368). In this work, Putu encouraged the drawing of a clear distinction between correct *nianfo* practices and evil ones, through which he attempted to prove the justice of *nianfo* practice and to systemize the Pure Land Buddhist doctrines that had been developed in China so far. In this sense, the *Baojian* is extremely important for us to understand the development of Pure-land Buddhism during the Yuan; however, Buddhist scholars have not paid serious attention to it. This article attempts to analyze the theory of *nianfo* practices in the *Baojian* and to clarify the influences of some renowned patriarchs upon it.

13. On the “Aspect of Going” (*Wangxiang* 往相) and the “Aspect of Returning” (*Huanxiang* 還相) in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註

Takudō ISHIKAWA

The phrases for the two aspects of merit-transference, “aspect of going” (*wang-xiang* 往相) and the “aspect of returning” (*huanxiang* 還相), in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 are not found in sutras and commentaries before the *Wangsheng lun* 往生論 (*Treatise on Birth in the Pure Land*) and the *Wangsheng lunzhu* (*Commentary on the ‘Treatise of Birth in the Pure Land’*). Therefore, these two phrases are taken to be the creation of Tanluan. The philosophical background of the “aspect of returning” (*huanxiang*) has been considered to be “the gate of traveling in the forest” (*yuanlin youxidi men* 園林遊戲地門) as described in the *Wangsheng lun*. While I agree that this concept is its primary philosophical background, I believe that the concept in the *Mahāprajñā-*